



ノブレス オブリージュ

Noblesse oblige

貴き者の責務

日本住宅公団初代総裁 加納久朗 第三回

ひさあきら

作家 高崎哲郎

〈その家系②〉

徳川將軍側近の名流

〜江戸後期の激浪を生きる〜

加納久朗の家系図を江戸後期にさかのぼり引続き語りたい。一宮藩第2代藩主加納久堅は天明6年(1786)8月75歳の長寿を全うして死去し、養嗣子久周が相続した。第3代藩主となる久周は旗本大岡忠光の次男で、安永元年10月久堅の養子となり、その娘を室とした。同6年10月遺領を継ぎ、12月従五位下備中守に叙任され、翌7年3月大番頭(江戸城などの警備に当る大番の隊長、格式は高い)、6月初代藩主久通以来の地位である側御用取次(將軍側近)に昇進して遠江守に改めた。田沼意次政権下にあつて、開明派松平定信(白河藩主)を中心とした反田沼グループに参加した。天明7年(1789)田沼失脚を受けて定信による寛政改革が開始されると同時に御側となり、改革政治の推進勢力の一人として活躍した。老中松平定信と同本多忠籌それに加納久周は寛政改革の中心人物として「寛政の三忠臣」と呼ばれる。

定信は、その著『宇下人言』の中で「(久周の)人となり剛直、至てよく人を見る。又偉人」と評し、「初て牧野備前守かた(方)参勤交代を行う大名に昇格した時期は弘化期(1844〜1847)で、藩主久壽の時である。藩主が支配地に直接出向くようになった背景には、異国船の侵入に備えて沿岸警備を徹底させるねらいがあったものと思われる。久壽は戦国時代の一宮城跡(現城山)に陣屋を構えたが、小高い丘陵の上に立つ陣屋は眺望にめぐまれ、領内はもとよりはるか海岸線から沖合まで一望に収めることが出来た。

「内憂外患」の時代であつた。打ち続く凶作は農民らを疲弊の極に追い込み、打ちこわしなどの暴動に走らせた。日本の周辺海域にはイギリス、アメリカ、ロシアなどの帝国主義列強の艦艇がしきりに廻航し開国を求めてきている。一宮藩のある九十九里浜の沖合にも異国船が姿を見せるようになった。外国船の相次ぐ来航により政情不安が高まり、幕府の鎖国政策を根底から揺るがした。天保8年(1837)2月、大坂で起きた元東町奉行与力・陽明学者大塩平八郎による世直し騒動は驚天動地の大事件であつた。

水戸藩主徳川斉昭(烈公)は、事件の一報に接し「明日は江戸城に不時登城して老中どもを残らず呼び集め十分に国家のことを論じ、諸事儉素に返し、中興一新の説を述べようと思う」(現代語訳)と、幕政改革の緊急性を痛切に自覚したことを『丁酉日録』に記した。斉昭は同年『戊戌封事』(建白書)を將軍家慶に差出し、幕政全般にわたる改革が必要であると力説した。「内憂外患」が極めて深刻な段階にあることを指摘し、特に「内

にてあひ(会い)、忽ち信じて信友となる」と記し、久周を逸材として評価し、彼への友情と信頼を強調している。その後久周は寛政5年(1793)正月若年寄となり、同8年9月に上野国(現群馬県)新田郡内7か村と佐位郡内5か村に3000石を加増され、合わせて1万3000石となり以後藩の石高は固定する。彼は翌9年閏7月に側御用取次を辞し、同12年12月に伏見奉行(京都・伏見と周辺幕領の行政・裁判を担当)を勤め、文化5年(1808)6月致仕した。

次の第4代久慎は久周の嫡男で同6年11月大番頭を勤めたが、文政4年(1821)8月没した。久慎の遺領を襲封した第5代久儔は、文政4年12月に従五位下遠江守に叙任され、文政9年(1826)3月、それまで本拠としていた伊勢国三重郡八田村から陣屋を上総国長柄郡一宮本郷村に移し一宮藩藩主として入府した。譜代大名一宮藩(加納藩)が正式に誕生した。陣屋が置かれた一宮本郷村は一宮村ともいい、九十九里平野の南部を流れる一宮川下流の右岸に位置し外房往還の街道筋にあつた。寛政5年(1793)

憂」の最悪なものとして、困窮する民衆の蜂起と武備のゆるみをあげ「(相次ぐ民衆の打ちこわしは)畢竟上を恨み候て上を恐れざるより起り申し候」と強調した。「外患」もまた深刻化する一方だつた。天保8年6月、浦賀奉行が日本人漂流民を乗せたアメリカ商船モリソン号を「異国船打払令」により撃退する事件が起きた。斉昭は海防の緊急策として老中水野忠邦にオランダと清との通交を断絶し、自らの武力で蝦夷地を占領したいと申し出たが、取り上げられなかった。

久儔は陣屋の構築から間もない文政11年(1828)大砲1門を鑄造させ陣屋内に設置する。砲名は「活発」で、移動に便利なように長さ1・2mほどの車付台(台車)が備えてあつた。筒先の直径4cm足らずで玉も100匁(約375g)で大砲と称するには破壊力の乏しいものであつた。(以下地方史研究家中村泰氏(一宮町在住)の論文などを参照し一部引用する)。

前10年11月に大番頭となり、翌11年8月に備中守に改めた。天保4年(1833)6月に伏見奉行に移り、再び遠江守と改めた。同9年閏4月江戸城西丸の修築のために5000両を上納し、この年9月奏者番に昇進した。同13年10月病気を理由に致仕し、長子久徴に家督を譲り隠居した。老中水野忠邦は前年12年から天保改革を開始している。加納家は將軍側近として江戸幕府3大改革のうち、享保改革と寛政改革に深くかかわってきた。老中水野が推進した幕府

の村高は2471石7斗4升4合4勺8才で、加納氏と旗本篠山氏の相給(複数領主支配)であり、戸数は678戸であつた。天保14年(1843)の村明細帳によると、本百姓367人、水呑百姓232人、牛馬173疋を数え、寛政5年よりも戸数は減少している。天保の大飢饉の影響と考えられる。元禄期(1688〜1703)頃から、村では定期市の三斎市が開かれ、次いで六斎市も盛んになり九十九里地方を代表する交易場・宿場に発展した。

加納氏は享保11年(1726)初代藩主久通の時に大名に取りたてられたが、参勤交代を行わない定府(江戸在住)大名であつた。



一宮陣屋跡(今の城山公園) 藩領内から水平線まで眺められる

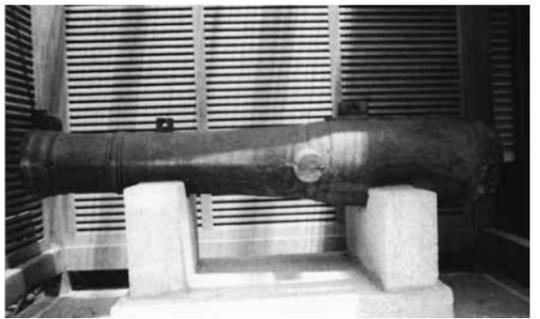
最後の改革に久儔が関与したかどうか不明である。改革の最中に職を辞したことにより水野の苛酷な改革方針を受け入れられないとする久儔の政治判断があつたのではないかと推測される。水野は翌14年改革の失敗から老中の座を追われる。

久徴は江戸後期文化10年(1813)6月5日生まれた。彼は幕末の加納家を語る上で最も重要な人物である。彼は若くして山鹿流軍学を学び、天保元年(1830)17歳の時に將軍家齊に初御目見えをした。同9年12月に従五位下大和守に叙任され、30歳で第6代藩主を襲封した後同14年12月備中守に改めた。(久徴の読みは4代後になる我が久朗と同音(ひさあきら)であり、久徴を「きゅうちょう」、久朗を「きゅうろう」と音読みして区別する習わしとなっている)。

久徴は幕府の海防策を先取りし藩領内の九十九里浜に砲台を築いた。天保15年(1844、弘化元年)8月、彼は蘭学修得を通じて知り合った西洋砲術の大家高島秋帆の指導を受け、鋳物師の増田安治郎と藤原重益に大砲を鑄造させた。翌弘化2年一宮海岸沿いの御林に台場を築いて大砲5門を据えた。5年をかけて築造していた5つの台場は北から南に、一、鱗芝口(南北長さ7間、高さ4尺5寸、16坪)、二、蓮谷口(南北長さ11間、高さ9尺5寸、46坪)、三、新道口(南北長さ6間、高さ7尺、26坪)、四、古道口(南北長さ7間、高さ9尺、36



台場記念碑（一宮町海岸部）



加納藩幕末の台場大砲
(千葉県文化財、茂原市所蔵)

坪)、五、神道口(南北長さ14間、高さ6尺、25坪)である。(1間は約1.8m、1尺は約33cm、1寸は約3cm、1坪は約3.3㎡)。大砲は砲身長長154cm、口径6.5cm、筒先の直径24cm、最も太いところ30.5cmの鋳物で、加納家紋(丸に違い柏)が彫り込まれている。台場の築造には農民ら1375人が動員され、日当として一人米5合(1合は約180cc)が藩から支給された。

大砲とはいっても、四斤山砲などの洋式砲に比べれば初歩的な火縄式で、射程距離はわずか数百mにすぎず、弾丸は炸裂しないため発射後に探し当てては何回も使われた。いよいよ据え付けが完了し、藩主久徴をはじめ多数の藩士が見守る中発射実験が始められた。ところが5門のうち、1門の砲台の基盤が軟弱だったせいか東の波打際に向かつて発射された弾丸が45度北に飛んで農作業していた農夫の近くに着弾してしまった。農夫は腰を抜かしおびえたとの逸話が残されている。久徴は台場付近に6軒の武士溜り陣所、倉庫などを建てた。一宮藩の砲台は幕府が江戸湾に築いた品川砲台(品川台場)より8年早く、禄高から判断すれば小藩にすぎない大名の海防

策としては画期的なものであった。大砲は1門だけ茂原市に保管されており、千葉県文化財に指定されている。台場の築かれた海岸の砂丘には記念碑が立っている。久徴は藩の軍制改革も断行し、100人程度の家臣団では迫り来る危機に対応できないとして町人や農漁民の青年たちを集めて銃砲を主力武器としたオランダ式の部隊編成や練兵訓練を実施した。部隊を赤白黒青黄の5色に色分けし、鉄砲組、弓組、歩兵組などに編成をして訓練を重ねた。「加納の陣立て」として幕府内外の評判を呼んだ。いち早く洋式軍隊に切り替えたのは、幕府要人として海外情報に接する機会が多かったからである。嘉永6年(1853)6月、アメリカ東インド艦隊司令官ペリー提督率いる軍艦4隻が浦賀沖に来航し幕府に開国を迫る。「外患」は油に火を注いだように一気に高まる。



久徴は嘉永2年(1849)正月大番頭となり、安政2年(1855)2月には「加納の陣立て」が評価されて講武場(幕府の洋式武術修練所、後の講武所)総裁を兼務し、同年11月に駿河守に改めた。翌3年2月講武所総裁を辞任したが、同年5月に奏者番に転じた。万延元年(1860)3月3日、桜田門外の変で大老井伊直弼が水戸浪士など18人

うちかけなどの他に和宮が使用した御籠を拝領した。御籠は菊花の紋章がついた小型の女性用のもので、現在一宮町の指定文化財として東漸寺に保管されている。文久3年12月、九十九里で真忠組の騒乱(浪士らによる金品強奪事件)が起きたが、年明け正月に久徴は福島藩主板蔵勝頭、佐倉藩主堀田正倫、多古藩主松平勝行らとともに鎮撫を命じられ一宮藩兵150人を率いて騒乱を鎮圧した。



久徴は將軍側近ではあったが、攘夷論や海防策のみを声高に論じる武辺一辺倒の藩主ではなかった。むしろ歴史・文芸・美術を愛する教養人であり、文人肌の藩主であった。文化・文政期(1804~1829)、農政家佐藤信淵が病氣治療のため一宮藩領に滞在中顧問格に採用し、洞庭湖(中国湖南省の中国第一の淡水湖、瀟湘八景の美景にちなんで久徴が命名)の拡張・整備や地引網漁業の振興をはからせた。この洞庭湖は「洞の堰」と呼ばれた溜池を拡張させ、

周囲に桜を植樹して桜の名所とし憩いの場所にしたのである。洞庭湖の完成と藩士で紀州流土木技術者岩堀市兵衛によって、湖の水を水田や民家に流下させる水路が開削され、城下を走る水路は「市兵衛堀」と名付けられた。

天保期(1839)



洞庭湖(現在)

1843)、先祖株組合を結成させ、当時農村指導者として著名な大原幽学に依頼して頼母子講*を普及させ耕地整理を進めた。下総国香取郡長部村に隅居を構えた幽学は、加納家との交流を好み4度も一宮を訪れている。漢詩人梁川星巖は尊王攘夷派であったが、一宮に仮寓して多くの漢詩を残し特に一宮川の黄蛭を讃えた詩は有名である。その他、久徴は詩人・儒学者の安積良斎、同藤森弘庵ら高級文化人とも交流した。一宮本郷村は外房往還に面し、久徴が藩主だった文政9年以降は静養を兼ねた文人墨客の来訪が多く外房における文化の中心の一となった。幕末の動乱期に幕府中枢で活躍した久徴は、元治元年(1864)3月22日に51歳で他界し、江戸・四谷の戒行寺に埋葬された。久徴は幕末の海防策の先駆者であり、同時に一宮藩の農業振興や歴史文化の向上にも尽力した開明的名君だった。

同年5月に養子久恒が遺領を継いだ。第7代藩主である久徴には子息がなかったため、文久2年閏8月に前田利和の次男久成を養子にした。が、翌3年6月に病死したため、改めて黒田直静の次男久恒を養嗣子にしたのである。久恒は元治元年6月から8月にかけて江戸市中取締りを命じられこれを勤めたが、慶応3年(1867)7月に弱冠21歳で病没した。このため養嗣子久宜が相続した。久宜は三池藩(現福岡県大牟田市)藩主立花種道の次男で、同年10月に家督を継いだ。最後の藩主(第8代)で久朗の父・久宜は、幕末・

の襲撃を受け暗殺された。襲撃者たちは天下の大法を犯した重罪人として逮捕・拘束された。久徴は浪士のうち6人を預かり、一宮陣屋内の座敷牢に収容した。彼は水戸の浪士の身柄をあえて拘束せず自由な振舞いを許されたことから浪士は感激し藩士や領民に水戸学を教えた。久徴は文久元年(1861)7月美濃国苗木藩(外様1万石、現岐阜県中津川市)の藩主遠山友詳とともに若年寄に昇進した。

老中安藤信正を中心に公武合体が進められ、久徴はこれに積極協力して、同年9月皇女和宮の降嫁に従う大役、道中供奉の総奉行(総責任者)を勤めた。尊王、攘夷、倒幕、開港など幕末の混沌とした世相の中、過激派や浪士による和宮襲撃や拉致などの不測の事態も予測され、道中供奉は決死の覚悟であった。11月15日京都を発してから22泊の長途の末に無事江戸到着の重任を果たすことが出来た。江戸到着後の12月、和宮から御礼として豊前国長盛作の大刀、鞍鎧1具、



皇女和宮
(加納久宜研究会資料)



皇女和宮の駕籠(東漸寺蔵)

明治・大正の激動期を生きた英知あふれる指導者である。次回紹介する。

〈付録〉

加納家は、寛政8年(1796)以降大名としての藩領石高が1万3000石となる。安政2年(1855)の領地を見てみると、旧陣屋が置かれた伊勢国三重、員弁、多気(3郡内14か村)に6924石余存在し、藩領全体の43.1%を占めていた。次いで陣屋があった上総国長柄郡の10か村で全体の27.6%に相当する4440石余、さらに上野国(現群馬県)佐位、新田両郡内12か村に2650石余存在していた。表石高は1万3000石であったが、込高(別途支給の石高)が3073石余あったため、実高は1万6073石であった。版籍奉還後の明治3年(1870)10月に領地替えが行われ、伊勢、下総、上野の3か国内32か村と上総のうち飛地5か村が上知されて、房総県知事が管轄していた長柄郡内30か村と安房国花房藩領であった21か村を下賜された。実高は1万6316石8升8合余であった。

(参考文献)千葉県一宮町教育委員会蔵「加納家史料目録」、『新訂寛政重修諸家譜』、『江戸武鑑』、『ふるさと今昔』(上総一ノ宮郷土史研究会編)、『房総諸藩録』(須田茂、『一宮町史』、筑波大学付属図書館資料など)。

(つづく)。

先月号P45の中段後ろから13行目の「久道」は「久通」の誤りでした。訂正いたします。

〈新刊紹介〉
筆者の『湖面の光湖水の命〜物語』琵琶湖総合開発事業(発行:サンライズ社)が7月1日に発行されます。
定価 本体1200円+税

*組合形式をとる共済的金融の仕組み。一定の期日に構成員が掛け金を出し、くじや入札で決めた当選者に一定の金額を給付し、全構成員に行き渡ったとき解散する